

Departmental Bulletin Paper / 紀要論文

エマスのアングロ・サクソニズム

Emerson's Anglo-Saxonism

小田, 敦子

Oda, Atsuko

Philologia. 2009, 40, p. 83-98.

<http://hdl.handle.net/10076/10600>

エマスのアングロ・サクソニズム

Emerson's Anglo-Saxonism

小田 敦子

(Atsuko Oda)

Ralph Waldo Emerson(1803-82)は、アメリカ最初の「みな知識人 (public intellectual)」として、「自己信頼」という人口に膾炙した言葉を中心に、講演や著作を通して同時代のアメリカ人の姿とあるべき姿とを語り続けた。エマスの考える「自己」は、常に、個人の集合体としてのアメリカ人全体との関係の中に存在し、彼の思考、その表現媒体ともに、公共性に深く関わろうとする特徴をもつ。たとえば、1837年の講演“The American Scholar”では、物質主義の社会の中で農民、教授、そして技師として部分化される人間の状態の始まりを、プラトンの「神々は、有用性のために、『一人の完全な人間』を多くの人間に分けた、丁度、手が指に分かれて、その目的によりよく叶うように」(53)という寓話に求め、人間が「もの」と化することの合理性と普遍性を認識した上で、同時に、『一人の完全な人間』がいる」ということを真理だと考えている。¹ 個々人は、自分自身であるために、時には元の全員を抱擁し受け入れなければならない。そのような全員を一体化したものが「一人の完全な人間」であり、学者であれば「思考している完全な人間」、つまり、アメリカ人の思考を代表する精神（ジニアス）をエマスは「アメリカの学者」と呼んだ。エッセイ“The Poet”では、人がその人の言うことを聞くと自分の考えが表現されていると感じる、「自分よりももっと自分自身である」(448)のような「詩人」、

或いは、「天才（ジニアス）」がそれにあたる。ここでも、エマソンは「アメリカにはまだ天才は出ていない」（465）と書いた。*Representative Men*（1850）が取りあげたような「代表的」人間、イギリスのシェイクスピア、ドイツのゲーテに匹敵するような国民的天才詩人を、アメリカが生み出していないということをエマソンは強く意識している。それは新興国アメリカでは無理のないことでもあり、この点に触れて、1850年代前半の講演“*The Anglo-American*”では、キケロとシーザーの出したローマ、ダンテとラファエロのイタリアを例にあげて、「あらゆる人種や時代は、その国民の精神や観念をうまく結び付けて表現した人と共に終わる」（201）と述べているが、² それにしてもそのような詩人が、国民の精神、つまり、彼が古代の「守護霊」の意味を踏まえて使う「ジニアス」を表現しなければ、その国民は不完全な存在でしかないという事実は残る。エマソンは「みな知識人」として、アメリカの国民精神の表現に強い関心を持っていた。

そのような関心はエマソンの講演のタイトルにも明らかだ。1833年から1842年の講演の一部を集めた *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*（1959-72）以来ほぼ30年後、³ 2001年には *The Later Lectures of Ralph Waldo Emerson, 1843-1871* が出版された。これらによって、エマソンが生涯に行った1500回以上の講演の中から、本として出版されていない、完全原稿として残っている114編の講演原稿が読めるようになった。「ジニアス」をタイトルに含む講演も、“*Genius*”（1839）の他、*New England*（1843）と題された五つの連続講演のうち、“*The Genius and National Character of the Anglo-Saxon Race*”と“*Genius, Manners, and Customs*”の二つ、“*Genius and Temperament*”（1861）、エマソンの友人で編集者であったCabotが原稿中の語句からとったタイトルである“*Permanent Traits of the English National Genius*”（1835）などをあげることができる。これらの講演からは、*New England*の成り立ちや特徴を、

Old Englandをはじめとした旧世界、さらにはアジアをも含む古い文化と比較して考えることに、エマソンが終始関心を持っていたことがうかがえる。“The Anglo-Saxon” という演題は容易に“The Anglo-American” (1852-55)に作り変えることができるように、エマソンにとってアメリカが、それ自身の特性を持つものの、アングロ・サクソンの国であることは自明の前提である。

エマソンは彼が生まれ育ったニューイングランドの人々が、植民地時代から独立戦争へという過去の歴史を神話化する中に見出した、「自由を愛するサクソン人」というイメージに代表されるアングロ・サクソニズムを共有している。「個人の主張が共同体や国よりも上であることを強調したにもかかわらず、民族の違いの下に人類を結んでいる『普遍』精神がある」という信念にもかかわらず…エマソンは終生『英米のサクソン人がもつ市民の自由に対する断固とした好み、近代の世界を保証している』と信じていることをやめなかった」と Lawrence Buell は “The Anglo-American” からの引用を例にあげて、アメリカにおけるアングロ・サクソンの支配力へのエマソンの確信を指摘している。⁴ しかし、上記引用中エマソンのアングロ・サクソニズムを強調するためにつけた「にもかかわらず」の部分が表わす「自己信頼」や「ジニアス」こそは、エマソンを特徴づけると考えられている問題である。一方で、ビュエルはエマソンにとって人種は単純化された問題であり、国を自慢することは彼に嫌気を起こさせたと述べている。エマソンの考えるジニアスは国民精神でもあるが、単純にアングロ・サクソニズムと重なるものでもない。ここには、エマソンの同時代のアングロ・サクソニズムへの批判的受容が隠れている。以下に、エマソンの講演と詩から彼のアングロ・サクソニズムの特質を考えてみる。

*

エマソンの後期講演集の編者たちは、演壇でエマソンは自分の考えやス

タイトルを試していただけては、彼が聴衆のために採用し、また聴衆に強いられた公の仮面である『ラルフ・ウォルドー・エマスン』を試していたのだ」と述べ、エマスンの多様な経歴とそれに応じたペルソナを紹介している(LLI:xviii)。家族や友人には“Ralph”と、後には、“Waldo”、*Nature*(1836)や *Dial* 誌に載せた論文や詩は匿名で、正式な書簡には“R. Waldo Emerson”、著書や小冊子には“Ralph Waldo Emerson”と使い分けられ、最後の名前は「コンコードの賢人」というイメージと結びついていると付け加えている。アメリカン・インディアンや奴隷制、女性問題に関する発言は講演だけで、「コンコードの賢人」の名前が付された本にはなかったことを考えれば、或いは、みな知識人として不特定多数の聴衆を相手にする講演者が当然とるであろう戦略としても、エマスンが彼の考えをすべて率直に語ったわけではないことは容易に察せられる。アングロ・サクソニズムについても慎重な議論をしている。

19世紀前半は、16世紀から18世紀のイギリスにおける宗教上政治上の論争が育てた自由を愛する政体という神話的なアングロ・サクソニズムに、人種主義的な意味が付与されていく時代であったと、Reginald Horsmanの *Race and Manifest Destiny: The Origins of American Racial Anglo-Saxonism*(1981)は論証する。Thomas Jeffersonは人類一般に進歩する力があるという啓蒙主義的な見方に立ち、自由な民主政ゆえにアングロ・サクソンを誇りにしたが、他の人種と比較したりはしなかった。⁵ ロマン主義と歩調を合わせて、特に、ドイツロマン主義が主張する「国民精神(Volkgeist)」の影響を受け、優れた政体を生む優れた人種的特徴に重点が移り、民族の起源や言語などの研究の隆盛により「文化共同体」(27)としての国家の独自性が注目されるようになる。ゲルマン民族の領土拡大の歴史が、アメリカの西進運動を支える根拠となり、アメリカン・インディアンの存在、奴隷として存在する黒人、アイルランド人など新移民の流入、

メキシコ戦争など、多くの民族との接触が人種イデオロギーとしてのアングロ・サクソニズムを強化していく過程を、ホースマンは人々に影響力のあった文献から検証している。

その文献の中には、人種主義が全盛となる 1850 年代に *English Traits* (1856) を出版したエマスンも含まれる。エマスンはあまり人種主義的ではなく、サクソン人の起源は人種の混合にあり、雑種的な強さを美点としてもつと信じていたことをホースマンは指摘し、「人種に関する様々な哲学的観念を彼自身の天才によって変質させた」(178)と総括することで、エマスンの一筋縄ではいかないアングロ・サクソニズムを暗示している。また、アメリカン・インディアンを高貴な野蛮人と見る啓蒙主義的な見方が衰退していくことを論じた章では、彼らの悲劇に共感した少数派の作家として、Cooper、Hawthorne、Thoreau、Melville の名前が挙げられているが、エマスンは含まれていない(190-91)。ホーソーンの短編 “Main-street” (1849) は、アメリカの歴史を紙製人形劇で見せるという趣向で、流行のアングロ・サクソニズムを明らかに揶揄して、以下のような植民地建設の記述をした。

During this little interruption, you perceive that the Anglo-Saxon energy-as the phrase now goes-has been at work in the spectacle before us. So many chimneys now send up their smoke, that it begins to have the aspect of a village street... (57)⁶

19 世紀半ばのフロンティアの西進と植民地の建設が一つのアングロ・サクソニズムとして捉えられ、時代の合言葉になっていたことが示されている。ソローも *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*(1849)の中で、アメリカン・インディアンの土地が開拓されていく様子を、アングロ・サ

クソニズムの圧倒的な力として描いている。

The honey bee hummed through the Massachusetts' woods, and sipped the wild flowers round the Indian's wigwam, perchance unnoticed, when, with prophetic warning, it stung the Red child's hand, forerunner of that industrious tribe that was to come and pluck the wild flower of his race up by the root.

… He [the white man] comes with a list of ancient Saxon, Norman, and Celtic names, and strews them up and down this river … and this is New Angle-land, and these are the new West Saxons, whom the Red Men call, not Angle-ish or English, but Yengeese, and so at last they are known for Yankees. (53)⁷

ソローはドイツからイギリス、さらにアメリカへとチュートン系民族の伸張の乱暴さを語り、「勤勉な」や「素晴らしい、素晴らしい常識」、「よく働く」などアングロ・サクソンにお決まりの形容詞を皮肉をこめて使っている。また、本題ではないが、怠け者で酔っ払いのアイランド人もその第二世代になり勤勉を身につければアングロ・サクソン化も可能であるという、必ずしもサクソン人に限定されないイギリス系アメリカ人が、アングロ・サクソンとして捉えられていることも、この引用は伝えている。これについてホースマンは、19世紀アメリカのアングロ・サクソニズムは白人を同化していく働きをしたことを指摘しているが、有色人種は別だったという(5)。ソローは絶えずアメリカン・インディアン の地名に言及する。

“Yankees”の語源については、オランダ語由来の説もあるが、ソローはアメリカン・インディアン の言葉を残そうとすることで、彼らの生命が惜しいと、アメリカの自然が惜しいと言おうとする。A *Week* のエピグラフ

として、ソローはエマスの詩、“Musketaquid”、コンコード川をアメリカン・インディアンの名前で呼んだ作品から、以下の部分を選んだ。

Beneath low hills, in the broad interval
Through which at will our Indian rivulet
Winds mindful still of sannup and of squaw,
Whose pipe and arrow oft the plough unburies,
Here, in pine houses, built of new-fallen trees,
Supplanters of the tribe, the farmers dwell. (*Poems*, 1847)

「アメリカン・インディアンの男と女のことを心に留めて蛇行する」川は詩人の意識の表現でもあるし、農民を呼ぶ「奪いとった者」という言葉には否定的な暗示があり、ソローの作品の趣意にふさわしい引用といえる。しかし、エマスの詩全体を一読しただけでは、植民者の営為に否定的な調子は見出しにくい。この引用の後には、農民を取り巻く風景を「武器庫」に喩える描写が続き、その奮闘努力はアングロ・サクソニズムの表現と言えるが、ホーソーやソローのようにアングロ・サクソニズムに明らかに批判的な口調はない。しかし、*From Emerson to King: Democracy, Race, and the Politics of Protest*(1997)でエマスの生物学的な人種混淆と文化的同化の間の「二重意識」が黒人思想家に与えた影響を論じた Anita Patterson は、エマスの「保守主義者」の観点からの間接的な批判を認めている。“Musketaquid”は、チェロキー・インディアンの強制移住政策に対する抗議の手紙を1838年に Van Buren 大統領に書いたエマスが、土地を奪われ、名前(言葉)を奪われるアメリカン・インディアンの、自身の父祖の土地の記憶を守るためにも愛惜の念を表明し、そのような喪失に抵抗していると論じている。⁸ エマスもアメリカン・インディアンの悲劇に共感

した少数派の一員であることは、彼のアングロ・サクソニズムの考え方からも傍証することができる。

*

前出の「ジニアス」に関わる講演の中から、アングロ・サクソニズムの本拠地、ニューイングランドを主題としたシリーズで最も人気のあったという“Genius, Manners, and Customs”を例にとる。ビュエルも指摘しているように、エマスンや同時代の人々は「人種」という言葉をより広い意味で使っている(264)。ニューイングランドという「人種」(LLI:40)は、「北部人」や「南部人」などと同様、地域と同義語であったり、“The race of scholars” (LLI:51)のように職業の分類であったりする。エマソンは“the Yankee is double distilled English.” (40)という当時の言い方を取り上げて、ニューイングランド人をイギリス人のスピリット、エッセンスであり、イギリス系が大多数を占めるアメリカ人の指導者であるべきだと鼓舞する。南部アングロ・サクソン人だけでなく、アメリカン・インディアンとも比較して、ニューイングランド人の特徴を、カルヴィニズムが培った知的な文化に求める。つまり、人種というよりは文化に着目している。17世紀以来の初等教育の普及が世界に誇るべき力であり、卒業後は村の文化会館が教育を引き継ぐ。その結果、多くの説教者や教師、家庭教師を、南部や西部へと送り出し、アングロ・サクソン文化を広めることをエマソンは好ましく思っている。このことは多くの講演でニューイングランドの強みとして繰り返し紹介される。詩“Woodnotes II” (*Poems*)にも以下のような言及がある。

Westward I ope the forest gates,
The train along the railroad skates;
It leaves the land behind like ages past,

The foreland flows to it in river fast;
Missouri I have made a mart,
I teach Iowa Saxon art. (1091)

この「私」はニューイングランドを代表する白松の木で、鉄道が「Daniel Webster よりもよい統一論者」(LLI:290)として、アメリカをアングロ・サクソンの商業と精神文化で一つの文化共同体として結びつけることを、エマソンが「軽率」(LLI:54, 284)と批判もした、当時の建国ラッシュのスピード感を感じさせる表現で語っている。“The Anglo-American”では、エマソンはイギリスとアメリカとの違いとして“Genius, Manners, and Customs”でも言及した変化の速さについて詳述する。ミシシッピ川沿いの州に行ってみると、「あなたが西部にいただくロマンスはあるぞつとするような現実の中に消えてしまう」(285)と大西洋岸の住人には信じられない無法地帯ぶりを嫌悪しながら、「自由と平等の感覚が妨げられることは決してない」(288)、或いは、「西部の州の今の状態は 50 年か 100 年前のすべての州の状態なのだ」(288)と思い直し、「自由を愛するサクソン人」という基本的精神は共有されていると考えることにし、文化による同化のための教育の重要性を強調する。

“Genius, Manners, and Customs”の話題は、その教育が、商業と並ぶニューイングランドの特徴である宗教精神を、「広大なもの、美しいもの、到達不可能なものの追求」(43)に向かわせるべきだというエマソンの持論へと展開する。共和制のためにも必要な雄弁への好みは、ニューイングランドの伝統であり、19世紀の「文化運動機関(Lyceum)」が経済人の雄弁ではない、ユニテリアンの牧師で文学者の雄弁を生み出したことにより変化を認める。しかし、それはレトリックの勝利であり、さらなる変化、哲学と詩の深さをもつ雄弁が生まれる時だと言う。「私は『講演室』を来

る時代の真の『教会』とみなす」(48)という比喩は、エマスンが牧師をやめて講演者となった意図を明言し、ニューイングランドがアメリカのジニアス、世俗化された普遍的価値、精神の発信者であることを待望する気持ちを表現している。しかし、現実のアメリカ社会は宗教精神を払拭したと以下のように観察する。

But the boundless opportunity of labor and the rewards of labor opened before us have rapidly changed the genius of the people.

There is in the Anglo-Saxon race a great power of labor, and no country exhibits more results of incessant labor than New England. But is it climate, or is it hereditary temperament—the love of labour becomes usually in our people a certain fury, a storm of activity, and a necessity of excitement. Unhappily, the feature of the times seems to be a great sensualism, a headlong devotion to trade and to the conquest of the continent… (49-50)

アングロ・サクソン人種からプロテスタンティズムの精神が消えたとき、労働への愛は暴力的で盲目的な力になると、エマスは古代北方民族の残虐さへの先祖返りを想像している。それはアメリカという風土のせいなのか、人種的な気質なのか、という問いかけは、同時代の人種主義的アングロ・サクソニズムを意識しながらも、英米の歴史や政治体制の比較、アメリカ各地の比較を日常的に行うことで、人種主義の単純化の陥穽を知るエマスンの、それに批判的な距離をおく姿勢を暗示する。アメリカ人が早く簡単にわかるものへ向かう感覚中心主義の横行に、アメリカの「最悪の国民性である軽率」(55)を認め、アングロ・サクソニズムの錦の御旗の脇にその負の実像である精神の空虚を対置する。1830年代から講演会の人気演

目になる骨相学や、それよりもさらに悪いとエマスンが言うメスメリズムに熱中するアメリカ人に、エマスンは「ジニアス」であるべき国民精神とは縁無き衆生を見ているだろう。「ジニアス」は自然の生命に根ざすものだが、人種主義を支える似非科学にもなった骨相学は「自然の神聖な秘密を素早く浅く処理する様式」(52)、メスメリズムは「我々が『自然』の法の裏をかく方法」(52)でしかないからだ。

エマスンの講演は、人種的には均質性が強かった当時のアメリカ人の大多数に関わるアングロ・サクソニズムを鼓舞する枠組を取りながら、同時に、それは自然の基盤をもたない、実体を伴わないイデオロギーであることを暗示することで、人種の実体、アメリカ文化の実体を問いかけ、控えめに彼自身の理想とするアングロ・サクソニズムを語ろうとする。そのようなあるべき姿を、エマスンは詩の中で考えている。

*

エマスンが「サクソン」という言葉を使った詩は3編ある。*Poems*(1847)には先に引用した“Woodnotes II”があり、主題の関連性がある詩として、コンコード記念碑の完成式典で代読された“Hymn”、メキシコ戦争や奴隷制を批判した“Ode, Inscribed to W. H. Channing”、最初の植民者と大地との応酬を描いた“Hamatreya”などがある。*May-Day and Other Pieces*(1867)には、以下に示す“Ode Sung in the Town Hall, Concord, July 4, 1857”の第四連に、「サクソン人種」が使われる。

The men are ripe of Saxon kind
To build an equal state,—
To take the statute from the mind
And make of duty fate.

United States! The ages plead,—
Present and Past in under-song,—
Go put your creed into your deed,
Nor speak with double tongue. (1212)

この詩は、全体としては、アメリカの独立と自由の称揚に、大西洋の海底ケーブルの開設という歴史的な出来事を組み合わせた儀式に間に合わせて作られた詩にみえるのだが、上記引用の二連目にはそれに不似合いな強い非難の口吻が感じられる。人種主義的アングロ・サクソニズムが確立した1850年代は、マサチューセッツ州が受け入れてしまった逃亡奴隷法に反対する姿勢をエマスンが明らかにした時代でもある。1851年のコンコード市民への演説で「ボストンは繁栄に甘やかされて、古からの名誉を泥の中に屈させた」と述べたように、⁹ 自由を信条としてきたサクソン人が奴隷制という支配制度を認める「二枚舌」への非難が込められている。

「サクソン人」を含む最後の一つの詩、*Selected Poems*(1876)に収められた未完の詩、“Boston”もやはり奴隷制に関わってくる。エマスは故郷ボストンの町に賛歌を贈りたいとずっと考えていたのだが、ボストンが奴隷制に対決できなかったことも加えるべきだと感じ、それと全体の肯定的な調子との折り合いをつけることができず、また、各連を終わるリフレインを作ることができずにいたのが未完の原因といわれている。¹⁰ ボストン茶会事件200年記念の詩を求められ、茶会事件の部分を書き足して発表された。昔の頑丈で貧しい、しかし、正直な労働をするアングロ・サクソン人が、アメリカの自然に受け入れられていくという姿を幾通りにも描いているが、それは以下の第9連でも同様である。

They laughed to know the world so wide;

The mountains said, 'Good day!
We greet you well, you Saxon men,
Up with your towns and stay!"
The world was made for honest trade,—
To plant and eat be none afraid. (233)

この詩に限らずエマスの使う「サクソン人」には、19世紀のアングロ・サクソン人種というよりはこの詩が描くような17世紀の植民者、さらには、古代人を連想させる響きがある。前出の“Ode”からの引用に「現在と過去が隠れた従旋律で、懇願する」という表現があったが、アメリカは西部を見れば初期の開拓者たちの生活が容易に想像できるように、古代と近代が隣り合ったような国であることを知っているエマスは、彼のアングロ・サクソニズムのヴィジョンの中で、ニューイングランドの過去を初めからやり直して、アメリカン・インディアンの自由、黒人の自由を愛する「サクソン人」を想像しているのではないだろうか。“Woodnotes II”は、エマスが愛したニューイングランドの白松に「土地の霊(*genius loci*)」のイメージを与えることで、エマスのビジョンであるアングロ・サクソニズム、つまり、古代ケルト族のように自然を畏敬し、風土に根ざした19世紀アメリカの「ジニアス」を想像する。

エマスのアングロ・サクソニズムの大きな要素に、アングロ・サクソン詩への関心がある。初期の講演“Permanent Traits of the English National Genius”(1835)は、多くをSharon Turnerの*The History of the Anglo-Saxons*(1799-1805)に依拠しながら、イギリス人の起源とその文学を紹介している。古英語の詩法の紹介もしているが、“Woodnotes II”の第一連、白松が知る人類誕生以前の世界を描く部分と“Hamatreya”の‘Earth-Song’の部分はそのようなアングロ・サクソン詩を模して書かれ

ている。つまり、エマソンはアメリカの土地の声として、古代サクソン人の言葉、さらに遡って、ケルト人の言葉を選ぶ。エマソンは白松を、アジアに起源をもつといわれるドルイド教徒が崇拜した榎の木やヤドリギを重ねていただろう(ELI:238)。自身の本質は詩人であると言い、それも poet ではなく bard というケルトの吟遊詩人を指す言葉を好んだ。洗練された英詩よりも、古代ケルト詩人の自然の匂いのする詩に理想の姿を求め、親近感を感じていた。¹¹ 前述の 19 世紀のアングロ・サクソン人種の用法と同じく、ここで言うアングロ・サクソン詩はケルトの詩も含んでいる。*English Traits* 中の“Race”の章で、「最良の国民は最も広く関係付けられている国民である」、「イギリス人の複合的な性格は混血した起源を暴露している」と述べるように、¹² エマソンのアングロ・サクソニズムは、人種上であれ文学上であれ、あまり人種の違いには拘泥せず、自然や人間の自然と素朴に対峙した力強い古代人への共感を表わすものだ。そこには、アメリカの自然と共に生きていたアメリカン・インディアンへの共感も含まれうるだろう。講演“The Genius of the Anglo-Saxon Race”の最後で、イギリスに勝る点として、アメリカには「無邪気と健康、思考の正しさ」があると指摘した後、やや唐突に、アメリカン・インディアンに言及して、こう言う。

Something of the physical perfection of the heroic age is exhibited by the Indian in the woods, but without the ardent temperament, and without the taste of the Greek. (LL I:18)

型通りの「高貴な野蛮人」のようであるが、エマソンはアメリカン・インディアンと 19 世紀アメリカ人との共通性に気づき、アメリカのサクソン人が、古代社会から近代社会へと、古代北欧人の暴力でではなく、アメリ

カン・インディアンの威厳と共に関係を築きながら、発展する道もあったのではないかと考えていることを示している。*English Traits* の“Universities”の章では、英米の大学生の体力を比較してこう言う。

The diet and rough exercise secure a certain amount of old Norse power. ... In seeing these youths I believed I saw already an advantage in vigor and color and general habit, over their contemporaries in the American colleges. (211)

自然と対峙しうる力と詩の言葉とをエマソンのヴィジョンとしてのアングロ・サクソニズムは提示する。“Woodnotes II”の松の木の言葉が古代北欧の「ルーン文字」で、それはアメリカ英語のような地方語ではなく、宇宙が理解する普遍言語だと解説される点にも、エマソンのアングロ・サクソニズムの志向する普遍性が垣間見える。自然を活かすという意識はアメリカという国の状況が考えさせたものであるが、自然への畏敬の念がもつ普遍性が様々な民族の多様な生命を含むアメリカの精神となり、世界の精神になりうる普遍性であることを、エマソンのアングロ・サクソニズムは暗示している。

註

¹ エマソンのテキストからの引用に付された頁数は、*Ralph Waldo Emerson: Essays and Poems*, Ed. Joel Porte and Harold Bloom (New York: The Library of America College Edition, 1996)による。

² Ralph Waldo Emerson, *The Later Lectures of Ralph Waldo Emerson 1843-1871*, Vol. I: 1843-1854, Ed. Ronald A. Bosco & Joel Myerson (Athens, GA: U of Georgia P, 2001). 以下、この本からの引用は、LLIで表わす。

³ Ralph Waldo Emerson, *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*, Vol. 1, Ed. S. E. Whitcer, R. E. Spiller & W. E. Williams (Cambridge, Mass.: Belknap P of Harvard UP, 1959). 以下、この本からの引用は ELで表わす。

⁴ Lawrence Buell, *Emerson* (Cambridge, MA: The Belknap P of Harvard UP, 2003), pp. 262-65.

⁵ Reginald Horsman, *Race and Manifest Destiny: The Origins of American Racial Anglo-Saxonism* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1981), p. 24.

⁶ Nathaniel Hawthorne, *The Snow-Image and Uncollected Tales, Vol. XI of the Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus, OH: Ohio State UP, 1974).

⁷ Henry D. Thoreau, *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (Princeton: Princeton UP, 1980).

⁸ Anita Haya Patterson, *From Emerson to King: Democracy, Race, and the Politics of Protest* (New York: Oxford UP, 1997), pp.126-155. “Musketaquid”の解釈については、アメリカ文学会関西支部例会でのフォーラム “The American Landscape in Emerson’s Poems” (2008年6月聖和大学)での基調講演 “Of Sannup and of Squaw’: Emerson, Hybridity, and the American Legacy in ‘Musketaquid’”による。

⁹ Emerson, *Emerson’s Prose and Poetry* (Norton Critical Edition, 2001), p.360.

¹⁰ Emerson, *The Poetry Notebooks of Ralph Waldo Emerson, eds.* Ralph H. Orth, Albert J. von Frank, Linda Allardt, & David W. Hill (Columbia: U of Missouri P, 1986), pp.745-47.

¹¹ 拙稿「“A Stroke of Genius”—エマソンの詩 “The Snow-Storm”」2008年 三重大学 *Philologia* 第39巻 pp.79-96、「エマソンの詩 “Woodnotes II”と土地の霊 (*Genius Loci*)」2009年 三重大学『人文論叢』第26号 pp.75-84 では、エマソンの詩法を取り上げた。

¹² Emerson, *English Traits, Vol. V of The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, Centenary ed.*, ed. Edward Emerson (Boston: Houghton Mifflin, 1903), p. 50.

本論は平成18年度・20年度科学研究費補助金基盤研究(c)「エマソンにみる、詩とアメリカ思想の親近性についての研究」(18520193)の研究成果の一部である。